

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520462

研究課題名(和文)カパンパンガン語の記述文法執筆のための調査研究：述語形態論および補文構造の解明

研究課題名(英文) Research for writing a descriptive grammar of Kapampangan: Exploration into predicate morphology and complement clauses

研究代表者

北野 浩章 (KITANO, Hiroaki)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20291263

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：カパンパンガン語の350ほどの動詞および形容詞について、網羅的な調査を行い、各語の形態論の詳細を解明できた。それぞれの語について、よく使われる派生形や活用形など、使用頻度についてもわかる限り、調べることができた。

補文構造については、約110種類の主節述語、約35種類の主名詞を調査し、それぞれの構文例を集めた。補文構造を示すマーキングにはどのようなものがあるか、どの述語にはどのような補文マーキングが主に用いられるかがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study investigated (1) the morphological structure of basic verbs and adjectives of Kapampangan, which is a member of the Malayo-Polynesian branch of the Austronesian language family, spoken mainly in Pampanga province, the Philippines. It revealed various inflectional and derivational forms of roughly 350 verbs and adjectives. It pointed out that frequencies with which particular forms are used vary considerably.

This study also explored (2) the structure of complementation. In this study, both complement clauses (e.g. that-clause in "I think that he is honest.") and noun-modifying clauses (e.g. that-clause in "the news that the president resigned") were surveyed. It collected examples of roughly 110 complement-taking predicates and 35 complement-taking head nouns. Special attention was paid to how complements are marked (e.g. linkers, complementizers, or determiners), and which complement-taking predicate makes use of which complementation marker(s).

研究分野：言語学

キーワード：カパンパンガン語 フィリピン諸語 述語形態論 補文構造 言語類型論 文法記述

1. 研究開始当初の背景

カパンパンガン語 (Kapampangan) は、フィリピン共和国、ルソン島中部のパンパンガ州とその周辺で話されている言語である。オーストロネシア語族に属するフィリピン諸語の一つである。話者数は1990年の統計では190万人ほどとされており、フィリピン国内に100以上あるとされる言語の中では話者数に関しては大言語と呼ぶことができる。

ただし、話者数を正確に把握するのは難しい。フィリピンには国語としてフィリピノ語がある(タガログ語とも呼ばれるが、フィリピノ語とタガログ語の関係は、日本語の「共通語」と「東京語」の関係とほぼ同じである)。フィリピン国内では各地方の言語だけでなく、フィリピノ語や英語などの多言語使用が広範に見られ、一人の話し手が多くの言語を操ることはまったく珍しくない。そのため、190万人というこの統計がどのように話者を認定したのか疑問である。

大言語であるにもかかわらず、カパンパンガン語には信頼できる記述文法書がない。それがカパンパンガン言語学にとって最大の問題である。本研究はその問題を克服するために計画された。

2. 研究の目的

この研究の目的は、カパンパンガン語の記述文法書をまとめるにあたって、研究代表者が最も重要で、かつ記述が不足していると考えられる以下の二分野の調査を行い、文法執筆に向けての作業を前進させることである。

(1) 述語の形態論

(2) 複文構造の解明

(1) 述語形態論

カパンパンガン語文の述語の位置を占め

る動詞の形態(変化形)は大変複雑である。まず、アスペクト(相)による変化があり、未然(これから起きること)、未完了(まだ完了していない、進行中のこと)、完了(すでに起きたこと)の三種類がある。また、文中で「主語」として機能する名詞句がどのような意味役割(動作主、動作対象、道具など)を担っているかによっても動詞の形態が変化する(フォーカスと呼ばれる)。

アスペクトとフォーカスはほぼすべての動詞の変化形と関わる。これら以外にも、aptative と呼ばれる「～できる」「偶然～する」といった意味を表す形態や、distributive と呼ばれる動作の複数性(「しばしば～する」「いくつも～する」といった意味)を表す形態、さらには使役形(「誰々に～させる」)などの変化形があり、変化の仕方も動詞によって多くのパターンに分かれ、どの動詞がどのような変化をするのかは、まだ完全に把握できていない。そのため、基礎的な動詞一つ一つの活用形をできる限り調べる。

(2) 補文構造

補文構造とは、「～と考える」「～と信じる」「～と考える」のように、述語(動詞)の目的語(「～と」の「～」にあたる部分)に補文節(内容節)を含む構造のことである。動詞ではなく名詞の場合(=主名詞)も含む。例えば、「大統領が辞任するという噂」「大勢の顧客と会う仕事」「魚が焼けるにおい」における「噂」「仕事」「臭い」が主名詞である。主名詞を修飾する節を名詞修飾節あるいは連体節などと呼ぶ。カパンパンガン語でこのような主節述語や主名詞の違いによって、補文節がどのようになるのか、補文を導く語(補文標識と呼ばれる)に何が用いられるのかなど、不明な点が多い。基礎的な主節動詞や主名詞を選択し、それぞれの補文構造を詳細に調査する。

3. 研究の方法

研究開始以前にすでに所有していた自然談話データや聞き取りによるデータだけでは不十分であったので、(1)(2)の目的のために、ネイティブスピーカーのコンサルタントとともに、構文例（例文）を集めることからスタートした。実際に対面してのデータ収集が理想であるが、事情が許さない場合にはインターネットを通じたデータのやり取りも行った。

4. 研究成果

(1) 動詞の形態論は、以下のようなフォーマットで行った（データ整理はすべて英語を媒介として行っている）。例として「沈む」などの動詞を派生する例である。

SINK

Limbug ya ing banka.

'The boat sank.'

活用 *lumbug, lúlubug, limbug*

Palbug de ing banka.

'They will sink the boat.'

活用 *palbug, pálbug, pilbug*

基本的なアスペクトやフォーカスの形式の他に、さまざまな活用形・派生形の例を集め、基本的な動詞の活用形リストを完成させた。例えば、カパンパンガン語には、動作の複数性・多様性・激烈性などを表す「配分形」(distributive)という派生形がある。日本語で例示すれば「切る」「切り刻む」「突く」「何度も突く」のようなものである。これはどのような動詞からでも作られるものではなく、ある一部の動詞に特異なものであると判断でき、そのような派生形も新たに見いだすことができた。

(2) 一方、補文構造については、構文例は次のようなパターンをとる。には補文標識がくる。

(2a) [主節の述語] [補文節]

(2b) [主名詞] [名詞修飾節]

(2a)の例は次である。補文標識は *king* という語である。

[Mániuálá ya] king [aláng diós].

[He believes] that [there is no god].

しかし、補文標識にはいくつかの種類があり、主節の述語によって使い分けられているが、その基準はあいまいに思える。一つの述語に複数の補文標識が使える場合もあったり、コンサルタントによっては使う標識が異なるという個人差もあることがわかった。また国語の影響でフィリピノ語の補文標識が用いられることもしばしばである。

(2b)の例としては、次のようなものがある。(2a)と同じく、補文標識にはいくつかの種類がある。

[ing katutwan] na [dekap ne ning pulis ing abugadu]

[the fact] that [the police arrested the attorney]

この例では補文標識に用いられているのはフィリピノ語のリンカーと呼ばれる接続語である。このように、カパンパンガン語の構文にフィリピノ語の語彙が混じることもしばしばある。

さらに、カパンパンガン語の名詞修飾節は、いわゆる関係節と形式的には似ている（例えば英語で、[the news] that [I received yesterday] は関係節の例である）。本研究の(2b)タイプの例を多く収集し分析を行った結果、その延長

として、関係節との形式的・意味的な類似性・連続性に考察を広げることになった。もちろん、両者には決定的な違いもある(Kitano 2015 にてその一端を発表した)。今後さらに検討をする必要があるが、世界の諸言語の共通性・相違点を議論する言語類型論において、カパンパンガン語や、広くフィリピン諸語の名詞修飾節の今後の研究に大きな寄与をするものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

Kitano, Hiroaki. Complement and adnominal clauses in Kapampangan. 2015年度第1回「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(東京都). 2015年5月10日.

北野浩章「カパンパンガン語(フィリピン)の自動詞・他動詞」NINJAL Typology Festa 2013、国立国語研究所(東京都). 2013年3月23日.

北野浩章「カパンパンガン語の自他動詞の交替」共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」研究発表会、国立国語研究所(東京都). 2012年11月18日.

北野浩章「カパンパンガン語の各種構文と項構造」第7回動詞項構造研究会、名古屋大学文学研究科(愛知県) 2012年11月3日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北野 浩章 (KITANO, Hiroaki)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：20291263